

釣れ釣れなるままに

1999年思い出の釣行記 PART. 6

江差追分の名調子

鹿島釣狂

釣遊会第5回大会

☆閑 倦 日 平成11年9月19日

☆開催場所 小平川～羽幌港

☆入釣場所 古丹別川

☆潮 干潮 16:05 17cm

満潮 06:45 30cm

干潮 17:35 16cm

☆釣果 アカハラ 448 mm 4

ソイ 172 mm 1

重量 287 0g

合計 907 点

成績 11 位

累計点 54点 4位 (10, 19, 6, 8, 11)

4回計 36点 7位

異常気象

今年の夏は異常に暑い。連日30度を越える猛暑が続き、結婚したてのころ利用していた（そのころはまだまだ熱かった・・・コホン。）扇風機を押し入れの奥から捜し出して職

場に持ち込んだ。机上の文書が飛散してしまい、仕事は少々やりにくいが汗を流し続けるよりはましである。しかし、ちょっと席を離れると滝のように汗が吹き出してくる始末である。

職場に隣接する屋外プールが29度まで上がり温水プールの様相を呈している。例年は閑散としているプールだが、今年はプールに浸かる子どもたちの歓声が職場まで届いてくるほどの盛況ぶりである。さすがにシャワーの水は冷たいらしく、子どもたちはその水しぶきを真っ黒に日焼けした体に浴びながら、キャッキヤとさらに大きな奇声を上げている。子どもに付き添いのご婦人方もこの暑さには耐え切れなくなったとみえて、若いころに着用したと思われるビキニの水着を持ち出してきて子どもと共に水に浸かっている。

そんな狂暑の中、職場のトイレが水洗化になった。今までの夏はトイレから湧き出した蠅が汗ばんだ体に纏わり付き、仕事の邪魔をしていたが、すっかりいなくなった。ポットンという飛沫を想像させる音がさわやかな水の流れる音に変わっている。何よりも嬉しいのは、いつも職場中に漂って匂っていたあの悪臭がなくなったことだ。

釣遊会事務局から文書が届いた。

今年は異常気象のため海水温度が非常に高く、当初予定をしておりました第5回大会（目黒港～十勝港）方面への釣りを決行しても魚が薄いとのことで役員会により場所の変更とさせていただきます。

頼れるコースガイド

岩見沢市役所のメンバーが中心となって組織している『とんとん会』の大会が黄金道路一帯で開催されたが、全くと言ってよいほど魚がいなかったとのことである。他の釣りの状況も同じということで、急遽、役員会の議案となったわけである。

岩見沢釣遊会では、7年ほど前まで、9月の大会をオロロンラインで開催していた。私が入会した初年度、苫前港に入釣し、40cm強のアカハラとこの時期では珍しいカンカイの嫁さんで3位入賞となった記憶がある。それ以来の釣り場である。

古いガイド書を見ると、この時期釣れるものはやはりアカハラぐらいのものであり、嫁さんを取るのに大変苦労するとの事である。最近の『北海道の釣り』では、古丹別川右岸に入って入賞している者が多いようである。一応、入釣場所はそこに決めておくが、「この辺り一帯遠浅の粘土盤で釣りにならない」とのコースガイドが気にかかる。

私は前日から旭川へ出張が入り、当日は午後4時頃ようやく岩見沢に到着し、それからエサの準備となる。カチンコチンに凍ったイカゴロ120本は、さすがに今年の残暑のせいで融け方が早く、出発時間にはほどよい状態にまで持ち込むことができた。

江差追分の名調子で「カモメ~~の~~」

バスの中では夏の暑さを凌いだ会員の皆さんの宴会場となった。夕涼みのビールの習慣

がついたのか、いつになく冷えたビールをバスの中に持ち込んでいる会員が多かったのだ。

例年、この日の山岸氏は江差追分の全国大会に参加しているはずなのだが、今日は釣り大会を選んだということである。バスに乗り込むなり、追分大会に参加できない悔しさからか、はたまた釣り大会での大漁の抱負からか、彼の「かもめ～の～」の名調子がしばらく響いていた。しかも、酒の量が増えるにつれて変わっていくはずの調子がいつまでも快調なままであったのには驚かされた。

河口までに

古丹別川の橋を越えたところでバスから一人で降りた。暗い獣道を海岸目指して突き進む。途中から道はなくなりわずかに釣り人が踏み分けたと思われる道を歩いていたが、それもなくなり大きな木の切り株がゴロゴロと横たわっているところに出た。幾らかは進むことができたのだが、重い荷物のため足元が覚束無く、切り株からふらふらと落ち、その場に横たわってしまった。仕方がないのでそこに一旦荷物を置き、暗い中をあちこち歩きながらよく見ると、古丹別川の川岸が見えた。もう一度荷物を背負い直し川岸に出てから川に沿って歩くと難無く河口にたどり着くことができた。初めての場所はこのようなことがあるから厄介である。

河口でも

河口に出て見ると、屯田釣友会のメンバー3名が盛んに竿を振っていた。どこまでが川で、どこからが海なのかよく分からないので、その一番海側に釣り座を設け、いつものようにドボンとイカゴロ仕掛けを振り込んだ。間もなくアカハラが次から次へと上がったが大物がいない。アカハラばかりで嫁さんが気になり、隣でやっている屯田釣友会の御仁に様子を伺った。先週もここに入った会員がおり、他にも何人かの釣り人がいたが、全体では川ガレイが3枚上がったとのことである。そして今日はソイの25cm程のものを確保しており、アカハラも50cm近いものをものにしている。運を天に任せて明るくなるまでここで頑張ることにする。しかしアカハラは上がるがせいぜい40cm止まりである。

しばらくやっていると、闇雲に遠投したカレイ仕掛けにアカハラとは確かに違うアタリがある。チョンチョンとやったらしばらく間があり、また、チョンチョンと来る。カレイを思わせるアタリだ。竿を手にもちチョンチョンの後のクックッーと来たところで確実にあわせる。さほどの抵抗もなく波打ち際に上がってきたのは、白い腹に褐色のまだら模様を配したチビゾイであった。

嫁さんは明るくなってからのアブラコか悪くてもハゴトコと考えていたが、これで一安心である。しかし、規定の15cmに届いているかどうかはチト心配である。指で図ると何とかギリギリのところまで届いているように思える。糸切りバサミについたメジャーを引っ張り出して図ろうとするのだが、目盛りがさびて見えなくなっておりはっきりしない。

河口からか

型が少しずつ大きくなってきて45cm程のアカハラも上がり、空も白々と明けてきたので嫁さん探しに場所を移動する。古丹別川右岸には明け方にやってきた羽幌の釣り会のメンバーが所狭しと並んでいる。その一番外れで第二の場所を確保する。しかし、先程釣ったはずのソイがない。移動の前、バツカンを洗った時に海水とともに流してしまったのか。アカハラを4本に整理した時に、他のアカハラと一緒に砂に埋めてしまったのかもしれない。15cmあるかどうかも分からず、しかもどこで落としたのかも分からないのだが、いったん戻って探すことにする。ひょっとしてまだ波打ち際に漂っているのかもしれないという淡い期待を込めながら元の釣り座に戻った。薄明るくなった波打ち際にライトを照らして見るがそんなチビは見当たらない。アカハラを埋めたところはどこだ。ていねいに埋めたためなかなか場所が分からない。いたいた。そこには確かにソイのしっぽだけがはみ出していた。いとおいしい気持ちで砂を丁寧に払い海水で洗って移動場所に戻った。

途中、竿を大きく曲げて魚を取り込んでいる釣り人がいる。駆け寄って見ると40cm程のヒラメである。嫁さんがこれなら文句なしだが、釣遊会の規定ではヒラメが対象魚になっているのだろうか。

移動場所ではアタリがほとんどない。時折コマセに寄って来たのか小さなウグイがアタリを告げるだけで針がかりもしない。竿を強くしゃくるとイカゴロ針にスレでワカサギのようなウグイがかかってきた。

9時の締め切り時刻には、まだ時間があるが地形が分からないこともあり、8時前に切り上げる。地図で見当をつけると、帰りのバスが通る（はずの？）三豊まではここからあと500mぐらいだろう。雨が降り出した。しかし、丘がどこまでも続いている。途中の釣り人に聞くがもうすぐだという。さらに前進する。古丹別川右岸から見ていた丘の切れ目になり、そこがいよいよ三豊と思い釣り人に尋ねるが、さらに丘が続きその先が三豊だという。そして、私が尋ねていた御仁に、強いアタリがあり、そこから35cm程のアブラコと30cm程の黒がしらをダブルで引き抜いた。これには驚いたが、私があらためて竿を出すには、幾らなんでももう時間はない。

新たな河口でも

8時40分ごろ、幌向川のほとりについた三豊のバス停にやっとの思いでたどり着く。雨が上がっているが、体は汗でびちょびちょである。しかも、またまた小雨が降り出してきた。しかし9時を過ぎてもバスは来ない。苫前漁港に降りた仲間3名を乗せてこちらに向かってもわずかな距離なのだが……。いやな予感がする。古丹別川で降りる時、運転手に帰りのバスは三豊を通ることを確認はしたが、ひょっとして私が降りた古丹別のところで探しているのかもしれない。一人ぐらい置き去りにしても気が付かないのかもしれない。9時45分頃バスがやってきた。しかし、釣遊会のものとは違う。読みは同じだが屯

田釣友会のバスである。手を横に振ったが、とにかく乗れと言う。運転手の仲間らしく盛んに連絡を取り合い、私がないのを聞き付けて国道からは外れた脇道の三豊バス停を通って見たとのことである。

助かった。運転手が携帯電話で確認し、小平川の待ち合わせ場所に向かうことになる。私がないのに気づき古丹別の川の所で探したそうである。面目ない。

さすが名の知れた屯田釣友会である。名前は存じないが皆さん温かい声をかけてくれる。ビールやつまみまで差し出してくれる。これには丁重にお断り申し上げた。金子幹事長が乗り込んで来て、私を見て怪訝そうな顔をされている。そうされるのも当然である。いつものメンバーとは違う見慣れない顔に戸惑っているのであろう。屯田の仲間に耳打ちされてニヤリと納得顔をされては穴があいたら入りたい気持ちになる。もちろんバスに穴などはなく、一番後ろの特等席の背もたれに隠れるばかりであった。

小平川の河口では

ようやく小平に到着した。釣遊会のバスでは運転手が恐縮して迎えてくれた。何も言うわけには行かず、「かえってどうも」の言葉を返すのが関の山だった。審査は始まっており、次から次へと50cmを越えるアカハラが提出され、審査用バケツからはみ出したアカハラが所狭しと並べられている。丁度私が駆けつけた時は、長老（失礼。あくまでも秀でて優れた人物の意味である）の庄司さんの審査をしており、52cmを越えるアカハラと40cmを越えるアブラコが異彩を放っている時であった。及ばずながら45番で最後の審査になる私の獲物もこっそり提出しておく。

審査結果、そして年間入賞？

審査の結果、重量優勝は花岡に入った庄司氏で1491（アカ52.2cm+アブ41.5cm+5.54kg）点、準優勝は堀内氏の1213点、3位は嵐氏で1199点、身長優勝は53cmのアカハラを釣った佐々木（忠）氏であった。私は907（アカ44.8cmソイ17.2cm+重量2.87kg）点で11位であった。1回から5回までの合計では55点となり年間の4位にくい込む健闘をしている。しかし、この後の6、7回大会は職場の行事と重なり、参加できないことが確定しており年間入賞は難しい状況ではある。

明けて2000年1月に釣遊会の総会があり、合わせて千年台最後の入賞者が表彰された。年間優勝者は第6回、第7回大会に優勝した吉井氏で、第4回の優勝と合わせて並み居る強豪をゴボウ抜きしての栄冠であった。ここであらためて感嘆符を込め盛大な拍手を送りたい。釣遊会では部門別年間大物賞を設けているが、アブラコは秦野氏の50.5cm、カジカは渡辺会長の51.5cm、カレイは大前事務局長の40.1cm、アカハラは佐々木（忠）氏の53.0cmであった。

私と言えば入賞した皆さんに拍手を贈るばかりであった。しかし、納竿期には来年度に向けて更なる飛躍をと秘策を巡らせる決意である。そして、2000年こそ『釣れ釣れな

るままに』に大物との格闘シーンを紹介できることを願い、今年度の駄文を閉じさせていただきます。チョン。

年間成績

① 4 / 4 豊浜 573 10位

② 5 / 23 穴間 776 19位

③ 6 / 20 滝ノ沢 821 6位

④ 7 / 11 東歌別 848 8位

⑤ 9 / 19 古丹別 907 11位

3925 ÷ 5 = 785